

若者×創り出す

東山青少年活動センター

つくるとは? 「創り出す」とは?

「つくる」という言葉を聞いたとき、どんなイメージを持つでしょう。辞書には「つくる」という言葉は次のように掲載されています。

——ある力を働かせて、新しい物事・状態を生み出す。まとまった形のあるものにする。(出典: デジタル大辞泉 小学館) ——

そして、漢字にしてみると、「作る」「造る」「創る」と3つの漢字で表記され、また「創作」「創造」「造作」と合わさった単語もあります。普段何気なく使っている「つくる」という言葉は、どんな物・手法、さらには何を生み出すのかによって、使い方が変わります。そのうえ、老若男女、障がいの有無に限らず、誰しもが気軽に楽しめる行動であるように思います。

「つくる」のひとつに、創作活動があります。例えば、絵画や陶芸、木工および音楽やダンス、演劇など多様に存在します。実際に、そういった活動に携わる若者を多く見かけます。中高生の部活動や大学のサークル、社会人になってからも活動を続けている人、芸術関連の大学や専門学校に通い、新しい作品を生み出している人など、いろいろな場所で、多様な表現する楽しさや面白さを感じています。

そんなさまざまな創作活動をしている若者を間近で見えて、創り出されるのは、作品だけではないように見受けられます。今回の特集では、若者が創り出すまでの過程や発表したときに触れる、経験・体験について考えてみたいと思います。

創作活動をしている若者に聞いた「創り出す」とは?

後世に残すためにものを作る
例えば、フンコロガシ(玉を
キレイに作る)はどうなんだ
ろう……

高等
生物

鬼魅

見る側にも見せる側にも魅力
がある
人の創造の産物
魑魅魍魎
そのときどきのきっかけで変
わる不確かさがある

うれ
しい

美術がだめだったのが、1個
できたら嬉しかった。
そこから「うれしい」が広がっ
たら嬉しい
「うれしい」がいっぱい

専門学校に行っていること、
将来のことも含めて挑戦
作るとき、やったことがない
ことをすることが多い「創り出
す」というのは挑戦だと思う
何かを創り出すのは難しい

挑戦

アイデアを考えると、
海を泳いでいる気分だから
イメージを巡らせるときは自由

海

自分の発見!
世界の
広がり!

作り始めるという点と生み出
すという点がある
生み出すという点では、自分の
中にあるものを使って作り出す
気づいていないものに気づく

若者一人ひとりの表現を大切にしたい自由な場づくり

東山アールスペース・からだではなそう～表現活動への誘い～

東山青少年活動センターでは、障がいのある青少年の余暇活動へのニーズの高まりを受け、創作表現と身体表現を手法とした事業に10年以上前から取り組み始めました。

そこでは、同世代のボランティアや活動をナビゲートするアーティスト達との交流を通して成長促進の効果も生まれてきました。例えば、アトリエ活動である「東山アールスペース」からは、平面に絵を描いていた若者がこの空間と出会い、次の年には立体での表現に移行したなど、作品を通じて経年的な状態変化が見られます。二次元から三次元への展開として発達の視点からの成長とも考えられます。からだを使った表現活動「からだではなそう」は、多様な表現を保障される空間です。そんな場を通じて、安心して自己表現すること、他者を受け入れる体験を繰り返すことで、自分の気持ちを伝える表現の幅が広がったという声が保護者からも寄せられています。また、市民が参加できる機会も設け、初対面の人たちと同じ空間で活動することで、それぞれのパーソナルスペースが広がる体験にもつながっています。こういった成長をみることができるのも、

	からだではなそう	東山アールスペース
内 容	身体表現活動	創作表現活動
対 象	京都市内に在住・在学または通勤先のある知的な障がいのある中学生～30歳までの青少年	
ボランティア	京都市内に在住・在学または通勤先のある高校生年齢～30歳の青少年	
活 動 日 (年間登録制)	毎月第2・4土曜日	毎月第1・3日曜日

単発で終結しない場づくりを行ってきた成果だと捉えています。活動センターでは参加対象を青少年に限定していますが、対象年齢を越えた場合は保護者たちが中心になって創り出しています。

参加する若者だけでなくナビゲーターやボランティアも活動を通して自身の成長を語ってくれています。それぞれの創造表現を保障する場からは、同時にボランティアの変化も促されるしかけとなっています。



2017年9月10日 京都新聞掲載

創り出される空間

京都市を中心に活動紹介を通じてを寄せていただき、活動する団体から、感じていることができました

NPO法人 スウィング

理事長 木ノ戸 昌幸

社会を「主体者」としてデザインする

スウィングでは「障がい者」と「健常者」を分けない。同様に——例えば・制度上は分かたれていても現実としての日々の中では——「利用者」「職員」、「被支援者」「支援者」などとも分けることはせず、誰もがNPO（＝市民団体）たるスウィングが展開する市民活動の「主体者」であるというスタンスを貫いており、このスタンスがメチャクチャ大事！と感じ続けている。絵や詩の芸術創作活動「オレたちひょうげん族」、地元・上賀茂地域の清掃活動「ゴミコロリ」、様々な子どもたちと交流する「コードモとアソブ」、世界各国からの観光客への

おせっかいボランティア、京都人力交通案内「アナタの行き先、教えます。」等々、スウィングの市民活動は多種多様である。しかしながら全ての活動に通底するのは効率や生産性を第一とした杓子定規な価値観や固定観念を緩め、人が生きることや働くことに新しい視座をもうけ、更新し続けるためのソーシャルデザイン……いやいや、もっと素直に言うならば「この息苦しい世の中をほんのちょっとでもヤワラかくオモシロくしたい！」というシンプルな願いであり、これは障がいの有無なんて軽々と超えた、現代社会に生きるほとんど全ての「主体者」共通の願いなのではないか？ と思ったり、思わなかったりしている次第である。



NPO法人 子どもとアーティストの出会い

プログラムディレクター 川那辺 香乃

私たち、NPO法人子どもとアーティストの出会い(以下、KAD)では、子どもたちの想像力や創造性の向上、多様な社会の創出を目指した事業に取り組んでいます。

京都のお隣、兵庫県内では、全公立中学校2年生を対象にした一週間の「職場体験」を「トライやる・ウィーク」と称し実施しています。TOA株式会社では毎年、「ミュージシャン体験」として神戸市立義務教育学校港島学園の中学生を受け入れ、プロの音楽家との創作活動を実施しています。KADはそのプログラムの企画制作を担当しています。

初日は緊張していた中学生も、次第に音楽家たちと打ち解け、音楽で表現することのおもしろさに目覚めていきます。最終日に同社自社ホール「ジーベックホール」で行われるコンサートでは、中学生がいきいきと舞台に立ち、観客を圧倒する

パフォーマンスをみせてくれます。また、このコンサートは地域住民の方もとても楽しみにされており、地域と企業の交流の場にもなっています。

本事業は1998年にスタートしました。子どもの社会問題は年を経て少しずつ変わっているように感じます。非営利組織の運営方法もここ数年で様々に変化しました。しかし、変わらないものを提供し続けることも、子どもたちには欠かせないことではないでしょうか。



「創り出す」に参画するボランティア

アトリエ活動の「東山アールスペース」と表現・コミュニケーション活動の「からだではなそう」とでは、それぞれちがったよさもありますが、どちらの活動も結果よりふれあいの過程を大切にしたい自由で柔軟な雰囲気です。その中で動きや言葉、表情などで参加者が「自分」を示してくれると、「伝わった」「つながった」という喜びを感じます。もちろん、一緒に取り組んだことが作品や身体ワークなどの形になるのも嬉しいものです。

一方で、反応がよくわからないとき、どの程度まで働き

かけたらよいのだろうか？ 私の「できた」は参加者にとってもそうなのだろうか？ など、難しさや迷いを感じることもあります。

これらすべてを含めて、取り組みがお互いの充実につながるように考え、ときにその形が見えかけてくる学びと発見の場がそこにはあります。そして、それは場を共有してこそ始まるのだと、私は「一緒にいること」の大切さを実感しました。

(ボランティアスタッフ 大学生20歳 男性)

今回「創り出す」をテーマに、若者の声や京都市を中心に創り出されている空間を取り上げ、若者が創り出すことを通して触れる経験・体験について考えてみました。

若者や運営者の語りを概観してみると、それぞれの空間で作品以外のものも創り出されているように感じました。若者に「創り出すとは？」という問いを投げかけたとき、十人十色の考え方や感じ方があり、そして、自分の世界で完結せず作品を通じて他者と交流していることが聞けました。また、活動の紹介では、作り手や運営者の視点から、さまざまな経験・体験が創り出されていることにも気が付きました。これらの経験・体験は(1)自分を表現する(2)他者に受け入れられる(3)他者を受け入れるという3つに通ずるのではないかと

思います。これらを若者が発揮できると、表現活動以外の空間でも楽しめたり、居心地がよく過ごせたりと豊かに生きていく可能性をもつことができると思います。このことは、特集でいろいろな人が語っているように、ノーマライゼーションの考えとも通ずる部分があるのではないのでしょうか。つまり、「個人が認められ、尊重される」空間での創作活動には、いつの間にか前述の(1)～(3)が自然と行われるということです。そこから既成概念にとらわれない自由な発想で生み出されたものを通して新しい価値観を感じることができそうです。

それが若者の「創り出す」活動が持つ、魅力ではないのでしょうか。



「創り出す」若者の姿

創り出すとは頭の中で描いているものを表現する方法であり、縛りがなく自由で終わりが無い活動だと思います。頭では思い描けるが表現できない場合もあれば、想像を超えるものが生み出される場合もあります。若者は創り出す過程の葛藤を感じながら、生み出す達成感に魅力を感じ、次はどんなものが生まれるかという期待から新たなものを創り出します。加えて、創り出すこととは一人で完結するのではなく、他者と分かち合うことに若者は魅力を感じています。自分から生まれた表現を通して他者の感性を知ること、また、他者の表現を通して生まれる自分の感性に気づくことで自分の世界の広がりを実感します。

例えば「からだではなそう」や「東山アートスペース」では障がいのあるなしに関わらず共同の空間を楽しむ過程で、バーバル(言語)なコミュニケーションでは上手くいかないことに会います。共に創り出す過程を通して相互にメッセージを送りあい、様々な表現方法をお互いに学びます。「からだではなそう」や「東山アートスペース」が芸術の完成度を求める空間ではなく、若者同士が表現できることを楽しむ空間であることを重視する理由は、共に創り出す空間の中で刺激し合い、お互いに新しい自分に気づく機会を大切にしているためです。

居場所と出会い、化学反応と創発

アウトサイダーアート、エイブルアート、ボーダレスアート、アールブリュット、生の芸術、障がい者芸術……さまざまな呼ばれ方で、障がい者や、専門的な芸術教育を受けない人による芸術作品や芸術行為が名付けられ、それらが徐々に、芸術分野の専門家だけではなく、福祉やまちづくりなどを担う方々にも広く注目されるようになってきました。

画家、ジャン・デュビュッフェによる命名の「アールブリュット」というフランス語が一番早いと思われるので、そこからすでに70年を超えていて、さらに、芸術のジャンルも美術だけではなく、工芸やデザイン、音楽やダンス、演劇とどんどん広がっている現状です。もちろん、とても喜ばしいことですが、まだまだ、検討することも多く残っています。

私も細々とした活動ですが、障がい者とそのヘルパーさん、アーティストや学生たちが集い、時には発表もする「めくるめく紙芝居」というものを10年ほどやってきました。いまになると、一番の機能は、こども食堂とも繋がりますが、障がい者たちの「居場所」づくりと、市民、学生、芸術家と障がい者との「出会い」づくりだったのだらうと思っています。

ただ、芸術家と障がい者の出会いには、もう一つ、大きな機能——いや、機能というよりも、化学反応という方がいいかも知れませんが——があります。

思いがけないもの、いままでに見たこともないような「未知」を創るという面白い出来事が待っています。「常識に囚われない」と簡単に言っても、実は、それだけで集まると、芸術分野の定式とか、障がい者福祉の定石とかに、どうしても囚われることが多いものです。

こういう思いがけない出会いによる化学反応を、芸術上の「創発 [エマージェンス]」と私は考えていて、生物が生命現象として自ら自己形成的に創発を繰り返しつつ、突然変異を起こして進化するのと同じように、芸術もまた、そういう思いがけない出会いによって、創発が起きるのではないかと考えています。

私たちのまちの片隅のほっこりとした居場所、心地よいのと同時に、見たこともないような芸術、初めて出会う人びととの対話が生まれる可能性、それが、障がい者芸術、あるいは、アールブリュットの空間の魅力だと思っています。



京都橘大学教員 小暮 宣雄